

満州開拓青年義勇隊から軍隊に志願

栃木県 渡辺常夫

義勇隊三カ年の訓練所の課程を終了し、志願兵として北満の黒河省道場で、兵隊検査に合格、入隊するまでの間、開拓団員と共に生活して入隊の日を待っていた。

召集令状がついに来た。昭和二十(一九四五)年四月二十五日夕刻午後四時頃だったと思う。団本部の伝令が乗馬で来て、池田計三と渡辺常夫に召集令状が来ているので直ちに本部へ六時までに集合せよとの事、二人で早目に夕飯を済ませて、本部までは約五キロの道程があるので、半分駆足で到着してみると、事務所には十五人程が集っていた。その中に同じユウホウ部落の大森人志君、沢村裕吉君(二人はソ連軍と対戦し戦死)、古川千代次君、薄井寛君もいた。阿久津先生が事務所に入って来て「今から召集令状を渡すが、入隊場所

と日時を良く確認せよ」とのことで、令状を見ると四月二十八日午後一時、ハルピンの兵事部に集合と書いてある。池田君、大森君、薄井君は環理の部隊に入隊するようになった。

阿久津先生より、入隊に当たって各自の準備と心構えについて説明があり、帰りが夜九時頃になった。夜になると広野には北満特有の狼が二十四、三十四とも獲物を取るのに群をなして走行する時間である。当然一人や二人では危険で歩ける筈がない。幸いにして同じユウホウ部落から大森君、沢村君、薄井君、古川君、池田君と俺と六人で帰ることになり、勢いが出て来たので狼などいづでも来るなら来てみる狼よ、等と替え歌を歌いながら元気良く歩いている内に、約五キロの道程をいつの間にか着いてしまった。

いよいよ国の為とは言えども、住み馴れた山あり、鏡のごとく清らかに澄んで流れている川、三年有余同じ釜の飯を食って厳しい訓練を受けた拓友たちとも別れ、故郷を出てから一度も会ってい

ない両親と兄弟達にも会えることができずに、この紙切れ一枚で最後の別れかと、ただ心が痛むばかりであった。この令状により大勢の拓友に見送られて夕刻泥湫駅を後に出発した。

入隊

ハルピン市街に、関東軍の管轄にある、兵が外出した時に宿泊したり、格安に食事をしたりする所がある。訓練中から行動を共にしていた佐久山出身の古川千代次君と一緒に宿泊したのは何事にも心強かった。朝食をしてから兵事部に集合するまで時間の余裕があったので、飯店に二人で行き故郷の事を思い出し語り合いながら、これが二人の最後の別れと思ひ、幾分なれども良い中国料理を注文して腹いっぱい食べた。ハルピンの駅前にある兵事部前に行つて見ると、約五十人程が各方面から集合していた。張り切った係官の曹長が出て来て、今から名前を呼ぶから呼ばれた順に整理せよとのこと。ここで各部隊ごとに編成され、夕

刻薄暗くなる頃臨時列車で係官の指揮により二百人程が乗車して一路列車は南下した。列車の中は無駄口は一切厳重に禁止され、ただ列車は闇夜の中をレールの繋ぎ目の音だけを立てて南下している。

駅に到着

多分夜中の十二時頃だと思ふ、公主嶺駅に到着し下車すると、連隊からの指揮官と交代になった。将校一人、下士官十五人が駅に迎えに来ていた。係官の引率により約四十分程歩いて行つた所に独立歩兵第一連隊の正門を通り練兵場に到着した。係官の方から「今から各中隊に配属するから名前を呼ばれた者は前が出るように」とのこと。そのとき第十一中隊に配属になつた初年兵は二十人いた。各班ごとの引率下士官が来て、渡辺と新井は第四班だからと班内の寝台前に案内されて、ここで寝るように言われた。新井初年兵は向かい側の寝台に。何にしる真夜中の事なので班内は全員が

就寝している。電灯も薄暗く、取り敢えず寝る事にした。寝台の上には毛布二枚と真新しい敷布が敷いてある。隣の者に迷惑を掛けないよう寝るかと思うと、両隣の古年兵が、どんな野郎の初年兵が来たのかと狸寝入りしていて、毛布の間から覗かれているかと思うと薄気味悪くも感じた。その夜は寝つかれぬままにしようとうとうとしているうちに、練兵場から起床ラッパが聞こえてくる。そのうち不寝番が「起床！」の号令を掛ける。各自寝台の前に整列、班長が来て「第四班に初年兵として渡辺と新井が入って来た。知らしておく」と報告される。二人で「お世話になります」と挨拶した。初年兵は一日位はお客様扱いなので古年兵が一切やってくれる。食器に古年兵が盛付けてくれた朝食を、気の毒と馴れぬ怖さを感じながらも朝食を取る。食事後、初年兵係兵長の指示により私服と一つ星のついた軍服に着替えさせられる。ああ俺も今日からは関東軍の一兵士になったと思うと一段と緊張感が湧いてきた。何にしる人生経

験初めての事だ。借りて来た猫のようにキョロキョロ周囲を見ると、一足先に入っていた一つ星の初年兵がいる。下士官室に初年兵は全員集合の号令がかかる。集合して見ると九人だった。班長の五十嵐軍曹より「今日からお前達の教育に当たると訓示があり、そのあと初年兵係の志賀兵長より、これから初年兵としてやるべき日課の指導があった。

今日は連隊の初年兵入隊式ということで、全中隊約千有余人が練兵場に集合し連隊長の訓示と古年兵の分列行進が挙行され、式終了後各中隊に帰り、赤飯と盛り沢山な御馳走があり昼食を取る。午後は休みだったが、明日から初年兵として古年兵の御機嫌取りと日課のことで脳裏には休む暇がない。身体検査、身上調査、兵器、背囊の受領等のほか、これから初年兵としてのやらなければならぬ教育を受ける等で、多忙な毎日が五日程続いた。いよいよ本格的な初年兵としての教育に入ってくる。神奈川県出身で士官学校出の原少尉殿

が五十四人の教官として教育に当たることになった。その他、下士官、兵長が教育に当たる。生まれて初めて完全軍装を身に着けてみると、最初は思うように身動きも自由にできない状態である。

初年兵は三食の飯上げ飯盛、日中は軍事教練と厳しい毎日が続く。夕食後は消灯喇叭の鳴るまで兵器と背囊の手入れ、仲間に遅れないように勉強もしなければならぬ日課である。私の寝台の両隣には一年兵と三年兵が寝ているので、この二人の世話もしなければならぬ。全員の初年兵がこのように組み合わせられている。一人のミスで全員が責任を負わされ往復ビンタが飛ぶ。また、肝つ玉の小さい班長の為に、演習のやり方に気合が入っていないということで、七月の炎天下の中で昼食抜きの演習は辛かった。日曜日の外出は月一回、それも初年兵係の引率外出であるからそれ程楽しいとは思わなかった。古年兵の連中は日曜日が来るのが待遠しく、また、遊びに行く所が違う。六月下旬頃だと思ふ、連隊の古年兵の大方が急に

完全軍装で「記号演習」という事で出発するのを見送った。このことで中隊も班内もからからになつてしまった。古年兵も班内には十人程に減り、世話するにも楽になり、自分なりに自由な時間の余裕があるようになった（この記号演習と言うのは興安嶺突破演習のことで、各連隊から上等兵以上が参加した大規模な演習がトンキン湾周辺で行われたと後で聞いた）。

七月に入ると満州の広野に射す太陽は樹木が無い為か肌がひりひりする程熱い。完全軍装とはいかないが身に着けての演習は、我ら初年兵には体力的にも精神的にも並大抵の苦勞ではない。一通りの実戦に備えての教育も終了し、八月二日の頃だと思ふが、連隊長殿のもとに炎天下の中で一期検閲を無事に終了した。久しぶりに故郷の父母に現況報告をした事を憶えている。

日ソ開戦

不寝番勤務は通常二人で、一時間勤務である。

私と古年兵二人で、七日の真夜中午前二時から三時までの勤務の時間であった。営庭の方向から喇叭の音が聞こえる。その時、今頃一体何だろうと思ひ、慌てて外に出てよく聞くと、将校集合の知らせである。いち早く将校室に駆け込んで行つた。その時、幸いにして原教官殿が中隊に宿泊してしたので「将校集合の喇叭が鳴っております」と報告すると、原教官殿は軍刀を片手に持つて駆足で連隊本部に行く。中田中隊長殿は古年兵と共に記号演習に出動している為原教官殿が中隊長代理をする。十分程経つた頃原教官殿が帰つて来て全員集合の命令を出す。「ソ連兵の侵略により関東軍も戦う事になった。良く身辺を整理して、次の本部の命令が来るまでそのまま待機しているように」との命令であった。急いで朝食を取り本部の命令により出動準備にかかる。一週間分の糧秣、新品の軍服、弾薬受領等を完了し、練兵場において出動に当たつての完全軍装の検閲を連隊長殿より受ける。夜に入って住み馴れた兵舎との最後の

別れとあつて、各班共に今夜は無礼講という事で古年兵も初年兵もないから、飲んだり食つたり歌つたりの大変な騒ぎである。古年兵はともかく、初年兵の連中は今までに自由に食つたり好きな酒も飲めなかつたのに、幾ら無礼講とはいつても酔払つて口から泡を出しながら呑んでいるが、これから重い背囊を背負つて乗車場所まで約五キロ程ではあるが、まともに夜行軍ができるのかと、余計な事だと思つが同じ初年兵なので心配した。

真夜中の十二時、本部より出発準備の命令がかかる。出発に当たつて、各自に恩賜の煙草を一本ずつ渡され、兵舎との別れとなつた。

軍道の両側には所々にヨモギが一メートル位に生い繁つていた。初年兵の相原が、行軍中私に「どうも腹の調子が良くないから」といつて銃を渡し、隊の列から離れて用を足しに行つた。あの重い背囊を背負い、腰の廻りには小銃の弾薬、帯剣等を付けているので用を足すのに簡単にズボンを降すわけにはいかないだろうと陰ながら心配した。何

しる行軍中のことであつて、ゆっくりと夜空の星を眺めながらするわけにはいかない。

乗車場所に到着。班長殿の命令により直ちに各自の装具の点検に入る。点検したところ例の相原は帯剣の鞘丈があつて剣身が無い。大変な事ができた。班長殿もさすがに青くなつた。出発まで一時間しかない、相原を丸腰で戦場に連れて行く訳にはいかない、また、上官に知れたら班長殿も責任を問われる事になる。さあ、相原を一人で捜しに行かせることも当然できない。どの顔を見ても昨夜鱈腹飲んだ酒が残つていて捜し物をする状態ではない。班長殿は私が身体に合わないので余り酒は呑まないのが判つているので、本人と初年兵係の宮脇兵長と私に、三人で剣身を捜しに行つてくれと「命令ではなく頼む」と頭を下げられる。相原は埼玉県出身で經理専門学校を卒業しているので頭が良く、私も色々世話になつたので、相原に対する恩返しと思ひながら、相原が用を足した所を目標に捜しに行く。その夜は生憎雨上り

闇夜の上、ヨモギが一メートル以上も生い繁つている中での捜し物は容易なことではなく、また、時間も無い。無いからといっていつまでも捜している訳にはいかない。取り敢えず相原が用をたしたと思われる場所を重点目標に、相原を先導に捜し始めることにした。幸いに各人に小マツチを支給されていたので、そのマツチの明かりを利用することにした。葉から落ちる雫で着ている服が全身濡れ鼠のようになってしまい、マツチも思うように使えなくなつてきてしまった。満州の夜明けは早いのでマツチを使わなくても見えるようになった。捜し始めて三十分位進んで行くと、ちよつと嫌な臭いがして来た。宮脇兵長殿が「見つかつたゾー」と言うので近寄つて見ると、相原が用をたした上に剣身が生憎に横倒しになつていた。宮脇兵長殿がそれを取るなり剣身の平で「馬鹿野郎」と言いながら相原の頬を一発殴つた。剣身の心配は解消されたが、一刻も早く帰らなければ本隊が出発しているかも知れない、それこそ剣身どころ

ではない大変な事になってしまおうと言いながら、三人で無我夢中で駆足で到着して見ると、全員が輸送用の貨車に乗っている。五十嵐班長と古年兵二、三人が貨車の前で心配そうに待っていた。宮脇兵長が「ありました」と報告すると、「良かった、良かった」と言いながら早く乗れと言われたので乗ると間もなく出発した。五分遅れたなら三人はどういう事になったか思い出すと身に震えがくる。

出発に当たって、将校さんの家族がこれが最後の別れかとあつて家族揃つて見送りに来ていた。我が子を胸に抱いてお互いに手を振り泣く子を騙しながら片手で目頭をハンカチを押さえている姿を見ると、いかに軍人の妻だとは言え、戦場に行く夫と最後の別れかと思うと、チョンガー（独身男性）の私でも、ただ胸が打たれるだけであつた。

行く先は我ら兵隊には全く解らない。二日後の夕方、トンキンジョウ駅に到着した。小休止の後隊を整えて鏡伯湖に向かつて出発、重い装具を背負つての行軍は容易な事ではない。三日間夜もろ

くに寝ず、乾パンと水筒の水くらいの事で、体力の弱い者等は途中落伍者が始まった。連隊本部からの伝令により、敵ソ連軍機甲部隊は既に鏡伯湖周辺に集結しているので、我が連隊も鏡伯湖に向けて急行軍で到着せよとのこと、到着するまでにはまだ相当の距離があり時間もかかる。なにしろ大広野の為昼間の行軍は危険である。敵機に発見されて爆撃でも受けたなら忽ちにして全滅になってしまう。毎日が野宿と行軍が一週間も続けばいくら精神的教育を受け、気は張り切ついても疲れ切つてヘトヘトになつてはいる始末である。一応は実戦戦闘教育を受けたとはいえ、今度は実戦に入らなければならぬ。古年兵といえども経験者は誰一人も居ない。ただ一人中隊に佐藤准尉殿がノモンハン事変に参戦しているので、色々と戦闘に対する指導に当たる。ソ連軍の戦車は世界的にも優秀であるので、日本軍の火砲など全然受けつけないとのこと、トンキンジョウの飛行場で戦車攻撃用としてビール瓶にガソリンを詰め、一人一

本ずつ持たされた。いざ戦闘体制に入った時は蝟壺を掘ってその中に入り、敵戦車が接近して来たらビール瓶に詰めたガソリンを、戦車の後尾にある機関部に叩きつけるよう指導を受ける。これが本当にソ連軍の優秀な機甲部隊と実戦に入ったならば全滅になるような話もしたくらいであった。

中国人部落で大休止。また、鏡伯湖を目的地に真夜中行軍に入る。途中で連隊本部から行軍停止の命令がある。急に一体何が起きたんだろうと思う。本部より伝令が来て無電により、日本は「天皇陛下の勅命により、連合軍に無条件降伏したから、直ちに吉林の歩兵二連隊に集結せよ」とのこと、本部の命令により、弾薬は川に捨て身軽になって徒歩と貨物輸送で吉林に到着。明後日ソ連軍指揮官によって武装解除されてしまった。

明治に日本軍隊として創設され、百数十有余年の栄えある日本軍隊としての歴史は、日清、日露戦争の大勝、昭和の日支事変までの数ある歴史のページはここに至って永遠に消滅されることにな

ってしまった。

私達は捕虜としてソ連軍の指揮下に入り、自由な行動は許されなくなった。これから先はどうなるのか？ 誰もが経験したことのない日本有史以来の敗戦という心の惨めさと疲れで、運命は天に任せるほかはないと、誰もが心に言い聞かせておく外ないと思った。

ソビエトに抑留

九月上旬頃、ソ連軍側から、日本に帰国させるから準備をするように指示があった。このとき一個大隊一千人に編成されて、駅に到着して見ると、既に貨車には日本の軍用車二両と軍馬二頭が積まれている。一体日本に帰国するのに必要が無いだろうにと不思議に感じたが、ソ連軍の命令により乗車し発車すると、南下すべきものが輸送者は北の方向に進んでいる。ハイラルを通過、満州里方向に進行している。国境に近くなると満州の地理に明るい者は、夜に入ると脱走兵が続出するよう

になった。ソ連軍の指揮官に見れば日本軍捕虜一千人をソ連に輸送する責任があるため見張りが厳重になって来た。猛獣でも護送するかのようになり、通風窓には鉄格子、扉の前の板場を一尺位の円形に切抜き大、小便用に使用する。扉は鉄線でがんじがらめに縛られているので、停車しても自由に出ることはできなくなった。一日一回停車した時に水筒に水を汲みに行くことが許された。輸送中彼らからの食糧の給与は殆んどない。出発の際に戦時用の米を少し持参していたので、三日に一度位、ホームの安全な場所で停車して飯盒炊飯が許可になった。幸いにして携帯用燃料を持っていたので簡単に炊く事ができた。一つの飯盒の飯を二人で大切に三日位は食い延ばさねばならない。後は生米を鼠のようにポリポリと食う外はない。途中、世界的に知られ、寒さ広さで有名なバイカル湖に到着。貨車の中も解放されて、バイカル湖は見渡す限り青く澄んだ海のように広い。長い輸送中の疲れも忘れて、澄んだ水で久しぶりに

喉を潤し、また、腹いっぱい水を呑み、僅かに残っていた米を飯盒炊飯をして、仲間と輪になり少ない飯を分け合って食う。ここまで来てはすべて諦める外ない。彼らの看守も幾分柔んで来た。行き先は誰一人解らない。シベリア鉄道は大森林の中を進行しているだけで、周囲には何一つ変化はない。

ビースク駅に到着

約十五日間の貨車の生活も終わり駅ホームに到着。下車、ろくに食う事もなく長かった貨車輸送の疲れで膝ががくがく、身体はふらついてまともな足が前に進まない状態であった。

捕虜収容所生活

駅から一キロ位離れた所に我々がこれから生活に入ることになる。第二次大戦中、ドイツ兵の捕虜収容所に使用されていた所である。二、三日は使役がなかったので、終戦後一度も身体を洗う場

所も暇もなかったのでたまったものではない。夜寝ると栄養失調の身体からシラミは生血を吸っているので丸々と肥えて、身体中を駆け回っている。捕まえて両手の爪で潰すと汁が跳ねて目に入ることもあった。収容所の周囲は高さが三メートルもある分厚い松の板で囲まれて、四方の展望台にはソ連兵が自動短銃を持って厳重に監視している。

祖国を離れて何千里、酷寒零下五〇度という歌の文句の通りのシベリアのビースク捕虜収容所で、いつ祖国日本に帰れるあてもなく過ごさねばならなくなつた。

このような我々若き者が、青春とは何の為にあつたのかと、今をもつてして計り知れないものがある。思えば夢に見る父母、兄弟の面影、故郷の山や川、そして美味しかった田舎料理、捕虜収容所からの給付される食物を口に入れるたび、それが全身を通して腹に沁みるたび、その空しさと情なさが全身を包むばかりであつた。

ヤポンスケ、サルダート（日本の兵隊）万歳、

お前達は戦争に負けたんだから働けという。ダワイ、ダワイ（早く仕事をしろ）と、毎日重労働を強要され、いつ楽な作業が廻ってくるのか、また、いつ祖国日本に還れるのかの想いが募る連続の日々である。

シベリア抑留冬を迎える

いよいよシベリアの酷寒零下五〇度の冬を迎える事になる。バイカル湖周辺は特に寒いとの話は聞いていた。十一月ともなれば、雪は余り降らないが、身を刺すような寒さが来た。一月、二月、三月は特に地面の表土が約一メートルにもコンクリートで固めたかというように凍っている。そういう中で我々日本人にはそう簡単に到底できる作業ではない。一日のノルマはきつく、ダワイ、ダワイでノルマを達成しなければならない。これも敗戦国日本兵捕虜の身分であるのですべて覚悟はしていた。収容所から約一キロ位離れた川幅三百メートル位の位置に、大きな火力発電所があつた

ので、日本兵捕虜とドイツ兵捕虜、ソ連の囚人と時々石炭降ろしの使役に交代で使われる。捕虜には特権階級はなくなり体の健康な者が勝ちになる。冬期に入るとシベリア鉄道も積雪の関係で引込線の場合など、特に四〜六時間位遅れるのは普通である。日中の使役で疲れ切って寝込んでいる十時頃、ソ連側本部から石炭降ろしに三百人出するような命令が来たようで、自分も中隊から順番制などで使役に出ることになった。ちょうど生憎シベリアでも一番寒さの厳しい二月上旬頃だと思ふ。現場に到着して見ると石炭を満載に積んだソ連軍無蓋貨車が三十両程編成されてホームにズラリと列んでいる。スコップを渡され一両に十人ずつで作業にかかる。防寒服を着ているものの酷寒零下四八度、体全体が氷で包まれているような状態で冷え込み、作業も思うようには進まない。石炭一つ一つがかちかちにへばりついているので簡単に降ろすことができない。寒さと飢え、そして栄養失調との戦いで精いっぱいなので、その上作業が

満足にできる筈がない。夜明け方作業が終わり人員点呼を取ると一人がいない。中隊長が周囲を探すと、京都出身の木村という初年兵が倉庫の陰に腰を掛けたままスコップを持って氷死していた。寒さと飢えで毎日が二人、三人とただ無言のまま死んで行く。敗戦国日本兵抑留の惨めさは、体験した者しかわからないだろう。

昭和二十一年、抑留生活第一回目のシベリアの春を迎えることになった。健康で生き残った戦友もシベリアの気候風土にも幾分馴れて来た。栄養失調当時の顔にできた浮腫も取れ、お互いの顔に微笑も見られるようになった。ビスク捕虜収容所にも春が来て、広野には気候風土に合った花が咲いて来た。作業の休憩時間や昼休みに「ヨモギ」の新芽や、あかぎを幾分なりとも腹の足し前にするために摘み取って、宿舎に持ち帰り飯盒で煮て戦友同士で分け合って食う。

いつも佐久山出身で義勇隊訓練所三カ年の教育を受けた古川千代次、神奈川県出身の荒井孝吉、

群馬県出身の石田満の四人は何事にも行動を共にしていた。いつも日曜日になると寄り集って故郷の思い出話や、捕虜になると奴隷的に労働させられ、その揚句使い殺しにされてしまうのかなあなど、悲しい話ばかりなので誰一人笑顔など見せる者はいない。

二回目のシベリアの冬を迎える

シベリア厳寒の冬をまた越さなければならぬ。日本へ帰してくれる話など噂にも立たない。日増しに寒さが厳しくなってくる。二年目ともなれば幾分寒さにも馴れて来て自分なりに寒さを防ぐため工夫を凝らしたり、また、食料の給与も幾分良くなり作業現場に行っても民間人との会話も多少できるようになったり、作業などの要領を使いがらやるようになったので、現場監督などから「ハラシヨラボタ（仕事を良くやる）」と褒められるようになった。昭和十三年関東東軍とソ連軍とのノモンハン事変に参戦して負傷した彼らの現場監

督に使われたら「ヤポンスケ、サルダート」と、日本兵に足を一本もぎ取られたと言って徹底的に労働をさせられた。

シベリアの二回目の春を迎える

樹木の樹氷も溶け始め広野は一面銀世界であったが、あちこちが黒い土が見えるようになってきた。

誰ともなくあちこちから日本兵捕虜を帰してくれるという噂話が聞こえてくる。今まで彼らは嘘ばかり言っただけ使っているの、またかと誰もが本気にしない。作業の現場に行くと民間人が、日本兵は良く働いてくれたのでヤポンにダモイができるんだと言ってくれる。『日本に帰れる』ことが、時間が過ぎるに従って満更嘘ではないようである。

四月中旬頃だと思う。收容所長より突如、全員集合の命令があり、また、何かと思うと通訳を通じて「ヤポンスケサルダート」、日本の兵隊は我ら

ソ連国家の為に馴れない気候に、また、厳寒の中を良く働いてくれたので、日本に父母兄弟が待つている祖国日本に帰すとの訓示があり、全員が子供のようになり喜び上がった。

いよいよ今度は本当に帰れるんだ。念願の日本に帰るんだ、何より健康でいて良かった。厳しい重労働に加え、想像に絶する酷寒零下四五度から五〇度に迫る寒さと飢餓に苦しめられ、幾多の同胞が腹が空いた、何か食うものはないか、何か食わせてくれと、故郷の親、妻子も忘れて、ただただ食わせてくれと言って死んで行く戦友。人間の本能は食ふことのみにあると悟ったことは実に残念であった。

四月二十八日夕刻、亡き戦友の冥福を祈りつつバイスク駅を出発、シベリア鉄道で十五日間かけてナホトカ港に到着。約一カ月ナホトカ港収容所生活をする。

二十二年五月二十六日、日本の輸送船で舞鶴港に無事帰還したが、輸送船から故国の山河が初め

て見えた時の心境はとても筆舌に尽くせない嬉しさであった。

【執筆者の紹介】

昭和二年十一月二十日 栃木県那須郡西那須野町

下永田に生まれる

昭和十七年三月二十五日 那須郡西那須野町尋常

高等小学校高等科卒業

昭和十七年四月二日 茨城県茨城郡内原訓練所

入所

昭和十七年五月三十日 満州国黒河省嫩江訓練所

に入所

昭和十九年十一月 ハルピン第四七二部隊自

動車廠に派遣される

昭和二十年一月 泥秋共栄開拓団に帰着

昭和二十年一月 黒河街にて徴兵検査を受

ける

昭和二十年四月 公主嶺独立歩兵第一連隊

に入隊

昭和二十年八月七日 ソ連参戦により出動

昭和二十年八月十六日 トンキン城にて終戦

昭和二十年八月十八日 吉林歩兵第二連隊にて武

装解除

昭和二十年九月 シベリア・ビイスク收容

所に抑留される

昭和二十二年六月一日 復員 直ちに農業に従事

今日に至る

(栃木県 野沢 芳夫)

抑留記

栃木県 青木 久

一、出生から入隊

① どこで、いつ生まれ、いつ、どこの学校を卒業し、卒業後の生活状況。

亡父が皇宮警察官だったので、東京都荒川区町屋で、大正十三（一九二四）年二月一日生まれ。

その後、栃木県塩谷郡北高根沢村大字平田東高谷に在った日本専売公社高根沢取扱所へ移住。

昭和十三（一九三八）年四月、塩谷郡喜連川町尋常高等小学校高等科二年から、旧制栃木師範学校一部一年生に入学。

昭和十八年四月、本科三年生。当時大東亜戦争は、無謀なる戦域の拡大で兵員不足、八月に学徒動員令が発令され、八つ上がりの同級生殆どに召集令状。学校では止むを得ず、八月二十